菎蒻本

泉鏡花

一

如月（きさらぎ）のはじめから三月の末へかけて、まだしっとりと春雨にならぬ間を、毎日のように風が続いた。北も南も吹荒（ふきすさ）んで、戸障子を煽（あお）つ、柱を揺（ゆす）ぶる、屋根を鳴らす、物干棹（ものほしざお）を刎飛（はねと）ばす——荒磯（あらいそ）や、奥山家、都会離れた国々では、もっとも熊を射た、鯨を突いた、祟（たた）りの吹雪に戸を鎖（さ）して、冬籠（ごも）る頃ながら——東京もまた砂埃（ほこり）の戦（たたかい）を避けて、家ごとに穴籠りする思い。

意気な小家（こいえ）に流連（いつづけ）の朝の手水（ちょうず）にも、砂利を含んで、じりりとする。

羽目も天井も乾いて燥(はしゃ)いで、煤(すす)の引火奴(ほくち)に礫(つぶて)が飛ぶと、そのままチリチリと火の粉になって燃出しそうな物騒さ。下町、山の手、昼夜の火沙汰(ひざた)で、時の鐘ほどジャンジャンと打(ぶ)つける、そこもかしこも、放火(つけび)だ放火だ、と取り騒いで、夜廻りの拍子木が、枕に響く町々に、寝心のさて安からざりし年とかや。

三月の中の七日、珍しく朝凪(あさな)ぎして、そのまま穏(おだや)かに一日暮れて……空はどんよりと曇ったが、底に雨気(あまげ)を持ったのさえ、頃日(このごろ)の埃には、もの和(やわら)かに視(なが)められる……じとじととした雲一面、星はなけれど宵月の、朧々(おぼろおぼろ)の大路小路。辻には長唄の流しも聞えた。

この七の日は、番町の大銀杏(おおいちょう)とともに名高い、二七の不動尊の縁日で、月六斎。かしらの二日は大粒の雨が、ちょうど夜店の出盛る頃に、ぱらぱら生暖(なまあったか)い風に吹きつけたために――その癖すぐに晴れたけれども――丸潰(まるつぶ)れとなった。……以来、打続いた風ッ吹きで、銀杏の梢(こずえ)も大童(おおわらわ)に乱れて蓬々(おどろおどろ)しかった、その今夜は、霞に夕化粧で薄あかりにすらりと立つ。

堂とは一町ばかり間(あわい)をおいた、この樹の許(もと)から、桜草、菫(すみれ)、山吹、植木屋の路(みち)を開き初(そ)めて、長閑(のどか)に春めく蝶々簪(かんざし)、娘たちの宵出(よいで)の姿。酸漿屋(ほおずきや)の店から灯が点(とも)れて、絵草紙屋、小間物店(みせ)の、夜の錦(にしき)に、紅(くれない)を織

り込む賑となった。

が、引続いた火沙汰のために、何となく、心々のあわただしさ、見附の火の見櫓が遠霞で露店の灯の映るのも、花の使と視めあえず、遠火で焙らるる思いがしよう、九時というのに屋敷町の塀に人が消えて、御堂の前も寂寞としたのである。

　提灯もやがて消えた。

ひたひたと木の葉から滴る音して、汲かえし、掬びかえた、柄杓の柄を漏る雫が聞える。その暗くなった手水鉢の背後に、古井戸が一つある。……番町で古井戸と言うと、びしょ濡れで血だらけの婦が、皿を

持って出そうだけれども、別に仔細はない。……参詣の散った夜更には、人目を避けて、素膚に水垢離を取るのが時々あるから、と思うとあるいはそれかも知れぬ。

今境内は人気勢もせぬ時、その井戸の片隅、分けても暗い中に、あたかも水から引上げられた体に、しょんぼり立った影法師が、本堂の正面に二三本燃え残った蠟燭の、横曇りした、七星の数の切れたように、たよりない明に幽に映った。

びしゃびしゃ……水だらけの湿っぽい井戸端を、草履か、跣足か、沈んで踏んで、陰気に手水鉢の柱に縋っ

て、そこで息を吐く、肩を一つ揺ったが、敷石の上へ、
蹌踉々々。
口を開いて、唇赤く、パッと蠟の火を吸った形の、正面の鰐口の下へ、髯のもじゃもじゃと生えた蒼い顔を出したのは、頬のこけた男であった。
内へ引く、勢の無い咳をすると、眉を顰めたが、窪んだ目で、御堂の裡を俯向いて、覗いて、
「お蠟を。」

二

そう云って、綻(ほころ)びて、袂(たもと)の尖(さき)でやっと繋(つな)がる、ぐたりと下へ襲(かさ)ねた、どくどく重そうな白絣(しろがすり)の浴衣の溢出(はみだ)す、汚れて萎(な)えた綿入のだらけた袖口へ、右の手を、手首を曲げて、肩を落して突込(つっこ)んだのは、賽銭(さいせん)を探ったらしい。

が、チャリリともせぬ。

時に、本堂へむくりと立った、大きな頭の真黒(まっくろ)なのが、海坊主のように映って、上から三宝へ伸懸(のしかか)ると、手が燈明(とうみょう)に映って、新しい蠟燭を取ろうとする。

一ツ狭い間を措(お)いた、障子の裡(うち)には、燈(ひ)があかあかとして、二三人居残った講中らしい影が映(さ)したが、御

本尊の前にはこの雇和尚(やといおしょう)ただ一人。もう腰衣(こしごろも)ばかり袈裟(けさ)もはずして、早やお扉を閉める処。この、しょびたれた参詣人が、びしょびしょと賽銭箱の前へ立った時は、ばたり、ばたりと、団扇(うちわ)にしては物寂しい、大(おおき)な蛾(ひとりむし)の音を立てて、沖の暗夜(やみ)の不知火(しらぬい)が、ひらひらと縦に燃える残んの灯を、広い掌(てのひら)で煽(あお)ぎ煽(あお)ぎ、二三挺(ちょう)順に消していたのである。

「ええ、」

とその男が圧(おさ)えて、低い声で縋(すが)るように言った。

「済みませんがね、もし、私(てまえ)持合せがございません。ええ、新しいお蠟燭は御遠慮を申上げます。ええ。」

「はあ。」と云う、和尚が声の幅を押被せるばかり。鼻も大きければ、口も大きい、額の黒子も大入道、眉をもじゃもじゃと動かして聞返す。

これがために、窶れた男は言渋って、

「で、ございますから、どうぞ蠟燭はお点し下さいませんように。」

「さようか。」

と、も一つ押被せたが、そのまま、遣放しにも出来ないのは、彼がまだ何か言いたそうに、もじもじとしたからで。

和尚はまじりと見ていたが、果しがないから、大な

耳を引傾（ひっかた）げざまに、卜掌（てのひら）を当てて、燈明の前へ、その黒子（ほくろ）を明らさまに出した体（てい）は、耳が遠いからという仕方に似たが、この際、判然（はっきり）分るように物を言え、と催促をしたのである。

「ええ。」

とまた云う、男は口を利くのも呼吸（いき）だわしそうに肩を揺（ゆす）る、……

「就きましては、真（まこと）に申兼ねましたが、その蠟燭でございます。」

「蠟燭は分ったであす。」

小鼻に皺（しわ）を寄せて、黒子に網の目の筋を刻み、

「御都合じゃからお蠟は上げぬようにと言うのじゃ。御随意であす。何か、代物を所持なさらんで、一挺、お蠟が借りたいとでも言わるる事か、それも御随意であす。じゃが、もう時分も遅いでな。」

「いいえ、」

「はい、」と、もどかしそうな鼻息を吹く。

「何でございます、その、さような次第ではございません。それでございますから、申しにくいのでございますが、思召を持ちまして、お蠟を一挺、お貸し下さる事にはなりますまいでございましょうか。」

「じゃから、じゃから御随意であす。じゃが時刻も遅

いでな、……見なさる通り、燈明をしめしておるが、それともに点けるであすか。」
「それがでございます。」
と疲れた状にぐたりと賽銭箱の縁に両手を支いて、両の耳に、すくすくと毛のかぶさった、小さな頭をがっくりと下げながら、
「一挺お貸し下さいまし、……と申しますのが、御神前に備えるではございません。私、頂いて帰りたいのでございます。」
「お蠟を持って行くであすか。ふうむ、」と大く鼻を鳴す。

「それも、一度お供えになりました、燃えさしが願いたいのでございまして。」

いや、時節がら物騒千万。

三

「待て、待て、ちょっと……」

往来留の提灯はもう消したが、一筋、両側の家の戸を鎖した、寂しい町の真中に、六道の辻の通しるべに、鬼が植えた鉄棒のごとく標の残った、縁日果てた番町通。なだれに帯板へ下りようとする角の処で、

頬被(ほおかぶり)した半纏着(はんてんぎ)が一人、右側の廂(ひさし)が下った小家の軒下暗い中から、ひたひたと草履で出た。

声も立てず往来留のその杙(くい)に並んで、ひしと足を留めたのは、あの、古井戸の陰から、よろりと出て、和尚に蠟燭の燃えさしをねだった、なぜ、その手水鉢の柄杓を盗まなかったろうと思う、船幽霊(ふなゆうれい)のような、蒼(あお)しょびれた男である。

半纏着は、肩を斜(はす)っかいに、つかつかと寄って、

「待てったら、待て。」とドス声を渋くかすめて、一つしゃくって、頬被りから突出す頤(あご)に凄味(すごみ)を見せた。が、一向に張合なし……対手(あいて)は待てと云われたまま、破れ

た暖簾(のれん)に、ソヨとの風も無いように、ぶら下った体(てい)に立停(たちどま)って待つのであるから。

「どこへ行く、」

黙って、じろりと顔を見る。

「どこへ行くかい。」

「ええ、宅へ帰りますでございます。」

「家(うち)はどこだ。」

「市ケ谷田町でございます。」

「名は何てんだ、……」

と調子を低めて、ずっと摺寄(すりよ)り、

「こう言うとな、大概生意気な奴(やつ)は、名を聞くんなら、

自分から名告(なの)れと、手数を掛けるのがお極(きま)りだ。……俺はな、お前(めえ)の名を聞いても、自分で名告るには及ばない身分のもんだ、可(い)いか。その筋の刑事だ。分ったか。」

「ええ、旦那でいらっしゃいますか。」

と、破れ布子(ぬのこ)の上から見ても骨の触って痛そうな、痩(や)せた胸に、ぎしと組んだ手を解いて叩頭(おじぎ)をして、

「御苦労様でございます。」

「むむ、御苦労様か。……だがな、余計な事を言わんでも可い。名を言わんかい。何てんだ、と聞いてるんじゃないか。」

「進藤延一（のぶかず）と申します。」

「何だ、進藤延一、へい、変に学問をしたような、ハイカラな名じゃねえか。」

と言葉じりもしどろになって、頤（あご）を引込（ひっこ）めたと思うと、おかしく悄気（しょげ）たも道理こそ。刑事と威（おど）した半纏着は、その実町内の若いもの、下塗（したぬり）の欣八（きんぱち）と云う。これはまた学問をしなそうな兄哥（あにい）が、二七講の景気づけに、縁日の夜（よ）は縁起を祝って、御堂一室処（ひとまどころ）で、三宝を据えて、頼母子（たのもし）を営む、……世話方で居残ると……お燈明の消々（きえぎえ）時、フト魔が魅（さ）したような、髪蓬（おどろ）に、骨豁（あらわ）なりとあるのが、鰐口（わにぐち）の下に立顕（たちあらわ）れ、ものにも事を欠い

た、断（ことわ）るにもちょっと口実の見当らない、蠟燭の燃えさしを授けてもらって、消えるがごとく門を出たのを、ト伸上って見ていた奴。

「棄ててはおかれませんよ、串戯（じょうだん）じゃねえ。あの、魔ものめ。ご本尊にあやかって、めらめらと背中に火を背負（しょ）って帰ったのが見えませんかい。以来、下町は火事だ。僥倖（しあわせ）と、山の手は静かだっけ。中やすみの風が変って、火先が井戸端から舐（な）めはじめた、てっきり放火（つけび）の正体だ。見逃してやったが最後、直ぐに番町は黒焦（くろこげ）さね。私が一番生捕（いけど）って、御覧じろ、火事の卵を硝子（ビイドロ）の中へ泳がせて、追付（おっつ）け金魚の看板をお目に懸け

る。……」

「まったく、懸念無量じゃよ。」と、当御堂の住職も、枠眼鏡(わくめがね)を揺(ゆす)ぶらるる。

講親(こうおや)が、

「欣八、抜かるな。」

「合点だ。」

四

「ああ、旨(うま)いな。」

煙草(たばこ)の煙を、すぱすぱと吹く。溝石の上に腰を落し

て、打坐りそうに蹲みながら、銜えた煙管の吸口が、カチカチと歯に当って、歪みなりの帽子がふらふらとなる。……

夜は更けたが、寒さに震えるのではない、骨まで、ぐなぐなに酔っているので、ともすると倒りそうになるのを、路傍の電信柱の根に縋って、片手喫しに立続ける。

「旦那、大分いけますねえ。」

膝掛を引抱いて、せめてそれにでも暖りたそうな車夫は、値が極ってこれから乗ろうとする酔客が、ちょっと一服で、提灯の灯で吸うのを待つ間、氷のご

とく堅くなって、催促がましく脚と脚を、霜柱に摺合(すりあわ)せた。

「何?大分いけますね……とおいでなさると、お酌が附いて飲んでるようだが、酒はもう沢山だ。この上は女さね。ええ、どうだい、生酔(なまよい)本性違(たが)わずで、間違の無い事を言うだろう。」

「何ならお供をいたしましょう、ええ、旦那。」

「お供だ? どこへ。」

「お馴染(なじみ)様でございまさあね。」

「馬鹿にするない、見附で外濠(そとぼり)へ乗替えようというのを、ぐっすり寐込(ねこ)んでいて、真直(まっす)ぐに運ばれてよ、

閻魔（えんま）だ、と怒鳴られて驚いて飛出したんだ。お供もないもんだ。ここをどこだと思ってる。

電車が無いから、御意の通り、高い車賃を、恐入って乗ろうというんだ。家数四五軒も転がして、はい、さようならは阿漕（あこぎ）だろう。」

口を曲げて、看板の灯で苦笑して、

「まず、……極（き）めつけたものよ。当人こう見えて、その実方角が分りません。一体、右側か左側か。」と、とろりとして星を仰ぐ。

「大木戸から向って左側でございます、へい。」

「さては電車路を突切（つっき）ったな。そのまま引返せば可（い）い

ものを、何の気で渡った知らん。」

と真（しん）になって打傾く。

「車夫（くるまや）、車夫ッて、私をお呼びなさりながら、横なぐれにおいでなさいました。」

「……夢中だ。よっぽどまいったらしい。素敵に長い、ぐらぐらする橋を渡るんだと思ったっけ。ああ、酔った。しかし可い心持だ。」とぐったり俯向（うつむ）く。

「旦那、旦那、さあ、もう召して下さい、……串戯（じょうだん）じゃない。」

と半分呟（つぶや）いて、石に置いた看板を、ト乗掛（のっかか）って、ひょいと取る。

鼻の前(さき)を、その燈(ひ)が、暗がりにスーッと上(あが)ると、ハッ嚔(くさめ)、酔漢(よっぱらい)は、細い箍(たが)の嵌(はま)った、どんより黄色な魂を、口から抜出されたように、ぽかんと仰向(あおむ)けに目を明けた。

「ああ、待ったり。」

「燃えます、旦那、提灯を乱暴しちゃ不可(いけ)ません。」

「貸しなよ、もう一服吸附けるんだ。」

「燐寸(マッチ)を上げまさあね。」

「味が違います……酔覚めの煙草は蠟燭の火で喫(の)むと極(きま)ったもんだ。……だが……心意気があるなら、鼻紙を引裂(ひっさ)いて、行燈(あんどん)の火を燃して取って、長羅宇(ながらう)でつけ

てくれるか。」
と中腰に立って、煙管を突込む、雁首が、ぼっと大きく映ったが、吸取るように、ばったりと紙になる。
「消した、お前さん。」
内証で舌打。
霜夜に芬と香が立って、薄い煙が濛と立つ。
「車夫。」
「何ですえ。」
「……宿に、桔梗屋［#ルビの「ききょうや」は底本では「ききやうや」］と云うのがあるかい、――どこだね。」
「ですから、お供を願いたいんで、へい、直きそこだっ

て旦那、御冥加（ごみょうが）だ。御祝儀と思召して一つ暖まらして

おくんなさいまし、寒くって遣切（やりき）れませんや。」とわざとらしく、がちがち。

「雲助め。」

と笑いながら、

「市ケ谷まで雇ったんだ、賃銭は遣るよ、……車は要らない。そのかわり、蠟燭の燃えさしを貰って行（ゆ）く。

……」

五

さて酔漢は、山鳥の巣に騒見く、梟という形で、も一度線路を渡越した、宿の中ほどを格子摺れに伸しながら、染色も同じ、桔梗屋、と描いて、風情は過ぎた、月明りの裏打をしたように、横店の電燈が映る、暖簾をさらりと、肩で分けた。よしこことても武蔵野の草に花咲く名所とて、廂の霜も薄化粧、夜半の凄さも狐火に溶けて、情の露となりやせん。

「若い衆、」

「らっしゃい！」

「遊ぶぜ。」

「難有う様で、へい、」と前掛の腰を屈める、揉手の肱

に、ピンと刎(は)ねた、博多帯(はかたおび)の結目(むすびめ)は、赤坂奴(やっこ)の髯(ひげ)と見た。

「振らないのを頼みます。雨具を持たないお客だよ。」

「ちゃんとな、」

と唐桟(とうざん)の胸を劃(しき)って、

「胸三寸。……へへへ、お古い処、お馴染効(なじみがい)でございます、へへへ、お上んなはるよ。」

帳場から、

「お客様ア。」

まんざらでない跫音(あしおと)で、トントンと踏む梯子段(はしごだん)。

「いらっしゃい。」と……水へ投げて海津(かいず)を掬(しゃく)う、

溌剌(はつらつ)とした声なら可(い)いが、海綿に染む泡波(あぶく)のごとく、投げた歯に舌のねばり、どろんとした調子を上げた、遣手部屋(やりてべや)のお媼(ば)さんというのが、茶渋に蕎麦切(そばきり)を搦(から)ませた、遣放(やりッぱな)しな立膝で、お下りを這曳(しょび)いたらしい、さめた饂飩(うどん)を、くじゃくじゃと啜(すす)る処——

横手の衝立(ついたて)が稲塚(いなづか)で、火鉢の茶釜(ちゃがま)は竹の子笠、と見ると暖麺(ぬくめん)蚯蚓(みみず)のごとし。惟(おもんみ)れば嘴(くちばし)の尖(とが)った白面の狐(コンコン)が、古蓑(ふるみの)を裲襠(うちかけ)で、尻尾の褄(つま)を取って顕(あらわ)れそう。

時しも颯(さっ)と夜嵐して、家中穴だらけの障子の紙が、はらはらと鳴る、霰(あられ)の音。

勢(いきおい)辟易(へきえき)せざるを得ずで、客人ぎょっとした体(てい)で、

足が窘（すく）んで、そのまま欄干に凭懸（よりかか）ると、一小間抜けたのが、おもしに打たれて、ぐらぐらと震動に及ぶ。

「わあ、助けてくれ。」

「お前さん、可（い）い御機嫌で。」

とニヤリと口を開けた、お媼（ば）さんの歯の黄色さ。横に小楊枝（こようじ）を使うのが、つぶつぶと入る。

若い衆飛んで来て、腰を極（き）めて、爪先（つまさき）で、ついつい、

「ちょっと、こちらへ。」

と古畳八畳敷、狸を想う真中（まんなか）へ、性（しょう）の抜けた、べろべろの赤毛氈（あかもうせん）。四角でもなし、円（まる）でもなし、真鍮（しんちゅう）の獅嚙（しがみ）火鉢は、古寺の書院めいて、何と、灰に刺したは

杉の割箸（わりばし）。

こいつを杖（つえ）という体（てい）で、客は、箸を割って、肱（ひじ）を張り、擬勢を示して大胡坐（おおあぐら）に撞（どう）となる。

「ええ。」

と早口の尻上りで、若いものは敷居際に、梯子段見通しの中腰。

「お馴染様は、何方様（どなた）で……へへへ、つい、お見外（みそ）れ申しましてございまして、へい。」

「馴染はないよ。」

「御串戯（ごじょうだん）を。」

「まったくだ。」

「では、その、へへへ、」
「何が可笑(おか)しい。」
「いえ、その、お古い処を……お馴染効(がい)でございまして、ちょっとお見立てなさいまし。」
彼は胸を張って顔を上げた。
「そいつは嫌いだ。」
「もし、野暮なようだが、またお慰み。日比谷で見合と申すのではございません。」
「飛んだ見違えだぜ、気取るものか。一ツ大野暮に我輩、此家(ここ)のおいらんに望みがある。」
「お名ざしで？」

「悪いか。」
「結構ですとも、お古い処を、お馴染効でございまして。……」

六

対方（あいかた）は白露（しらつゆ）と極（きま）った……桔梗屋の白露、お職だと言う。……遣手部屋の蚯蚓（みみず）を思えば、什麼（そもさん）か、狐塚の女郎花（おみなえし）。
で、この名ざしをするのに、客は妙な事を言った。
「若い衆、註文というのは、お照（てら）しだよ。」

「へい、」

「内に、居るだろう。」

「お照しが居りますえ？」

と解せない顔色。

「そりゃ、無いことはございませんが、」

「秘すな、尋常に顕せろ。」と真赤な目で睨んで言った。

「何も秘します事はございません、ですが御覧の通り、当場所も疾の以前から、かように電燈になりました。……ひきつけの遊君にお見違えはございません。別して、貴客様なぞ、お目が高くっていらっしゃいます、

へい、えッへへへへ。もっとも、その、ちとあちらへ、となりまして、お望みとありますれば、」
「だから、望みだから、お照しを出せよ。」
「それは、お照しなり、行燈なり、いかようともいたしますんで、とにかく、……夜も更けております事、遊君の処を、お早く、どうぞ。」
と、ちらりと遣手部屋へ目を遣って、此奴、お荷物だ、と仕方で見せた。
「分らないな。」
と煙管を突込んで、ばったり置くと、赤毛氈に、ぶくぶくして、擬印伝の煙草入は古池を泳ぐ体なり。

「女は蠟燭だと云ってるんだ。」
お媼(ば)さんが突掛(つっか)け草履で、片手を懐に、小楊枝を襟先へ揉挿(もみさ)しながら、いけぞんざいに炭取を跨(また)いで出て、敷居越に立ったなり、汚点(しみ)のある額越しに、じろりと視(み)て、
「遊君(おいらん)が綺麗で柔順(おとな)しくって持てさいすりゃ言種(いいぐさ)はないんじゃないか。遅いや、ね、お前さん。」
と一ツ叱って、客が這奴(しゃ)言おうで擡(もた)げた頭(ず)を、しゃくった頤(あご)で、無言(だんまり)で圧着(おしつ)けて、
「お勝どん、」と空(くう)を呼ぶ。
「へーい。」

途端に、がらがらと鼠が騒いだ。……天井裏で声がして、十五六の当の婢（ちび）は、どこから顕（あらわ）れたか、煤（すす）を繋（つな）いで、その天井から振下（ぶらさ）げたように、二階の廊下を、およそ眠いといった仏頂面で、ちょろりと来た。

「白露さん、……お初会（しょかい）だよ。」

「へーい。」

夢が裏返ったごとく、くるりと向うむきになって、またちょろり。

「旦那こちらへ、……ちょうどお座敷がございます。」

「待て、」

と云ったが、遣手の剣幕に七分の恐怖（おそれ）で、煙草入を

取って、ヤッと立つと……まだ酔っている片膝がぐたりとのめる。
「蠟燭はどうしたんだ。」
「何も御会計と御相談さ。」と、ずっきり言う。
……彼は、苦い顔で立上って、勿論広くはない廊下、左右の障子へ突懸る(つっかけ)ように、若い衆の背中を睨(にら)んで、不服らしくずんずん通った。
が、部屋へ入ると、廊下を背後(うしろ)にして、長火鉢を前に、客を待つ気構えの、優しく白い手を、しなやかに鉄瓶の蔓(つる)に掛けて、見るとも見ないともなく、ト絵本の読みさしを膝に置いて、膚(はだ)薄そうな縞縮緬(しまちりめん)。撫肩(なでがた)の

懐手、すらりと襟を辷(すべ)らした、紅(くれない)の襦袢(じゅばん)の袖に片手を包んだ頤(おとがい)深く、清らか耳許(みみもと)すっきりと、湯上りの紅絹(もみ)の糠袋(ぬかぶくろ)を皚歯(しらは)に噛(か)んだ趣して、頬も白々と差俯向(さしうつむ)いた、黒繻子(くろじゅす)冷たき雪なす頸(うなじ)、これが白露かと、一目見ると、後姿でゾッとする。——

「河、原、と書くんだ、河原千平(かわらせんべい)。」

やがて、帳面を持って出直した時、若いものは、軸で、ちょっと耳を掻(か)いて、へへへ、と笑った。

「貴客(あなた)、ほんとの名を聞かして下さいましな。」

犬を料理そうな卓子台(ちゃぶだい)の陰ながら、膝に置かれた手は白し、凝(じっ)と視(み)られた瞳は濃し……

思わず情が五体に響いて、その時言った。

「進藤延一……造兵……技師だ。」

七

「こういう事をお話し申した処で、ほんとにはなさりますまい。第一そんな安店に、容色と云い気質と云い、名も白露で果敢ないが、色の白い、美しい婦が居ると云っては、それからが嘘らしく聞えるでございましょう。

その上、癡言を吐け、とお叱りを受けようと思いま

すのは、娼妓(じょろう)でいて、まるで、その婦(おんな)が素地(きじ)の処女(むすめ)らしいのでございます。ええ、他の仁にはまずとにかく、私(てまえ)だけにはまったくでございました。

なお怪しいでございましょう……分けて、旦那方は御職掌で、人一倍、疑り深くいらっしゃいますから。」

――

一言ずつ、呼気(いき)を吐(つ)くと、骨だらけな胸がびくびく動く、そこへ節くれだった、爪の黒い掌(てのひら)をがばと当てて、上下(うえした)に、調子を取って、声を揉出(もみだ)す。

佐内坂の崖下、大溝(おおどぶ)通りを折込(おれこ)んだ細路地の裏長屋、棟割(むねわり)で四軒だちの尖端(とっぱずれ)で……崖うらの畝々坂(うねうねざか)が引窓

から雪頽(なだ)れ込みそうな掘立一室(ほったてひとま)。何にも無い、畳の摺剝(すりむ)けたのがじめじめと、蒸れ湿ったその斑(まだら)が、陰と明るみに、黄色に鼠に、雑多の虫螻(むしけら)の湧(わ)いて出た形に見える。葉鉄(ブリキ)落しの灰の濡れた箱火鉢の縁(へり)に、じりじりと燃える陰気な蠟燭を、舌のようになめらかして、しょんぼりと蒼(あお)ざめた、髪の毛の蓬(おどろ)なのが、この小屋の……ぬしと言いたい、墓から出た状(さま)の進藤延一。

がっしとまた胸を絞って、

「でありますが、余りお疑い深いのも罪なものでございます。」

と、もの言う都度、肩から暗くなって、蠟燭の灯に

目ばかりが希代に光る。

「疑うのが職業だって、そんな、お前(めえ)、狐の性(しょう)じゃあるまいし、第一、僕はそのね、何も本職というわけじゃないんだよ。」

となぜか弱い音(ね)を吹いた……差向いをずり下(さが)って、割膝で畏(かしこま)った半纏着の欣八刑事、風受(かざう)けの可(よ)い勢(いきおい)に乗じて、土蜘蛛(つちぐも)の穴へ深入(ふかいり)に及んだ列卒(せこ)の形で、肩ばかり聳(そび)やかして弱身を見せじと、擬勢は示すが、川柳に曰く、鏝塗(こてぬ)りの形に動く雲の峰で、蠟燭の影に蟠(わだかま)る魔物の目から、身体(からだ)を遮りたそうに、下塗の本体、しきりに手を振る。……

「可いかね、ちょいと岡引ッて、身軽な、小意気な処を勤めるんだ。このお前、しっきりなし火沙汰の中さ。お前、焼跡で引火奴を捜すような、変な事をするから、一つ素引いてみたまでのもんさね。直ぐにも打縛りでもするように、お前、真剣になって、明白を立てる立てるッて言わあ。勿論、何だ、御用だなんて威かしたには威しましたさ、そりゃ発奮というもんだ。明白を立てます立てますッて、ここまで連れて来るから、途中で小用も出来ずさね、早い話が。隣家は空屋だと云うし、……」

と、頬被のままで、後を見た、肩を引いて、

「一軒隣は按摩だと云うじゃねえか。取附きの相角がおでん屋だッて、かッと飲んだように一景気附いたと思や、夫婦で夜なしに出て、留守は小児の番をする下性の悪い爺さんだと言わあ。早い話がじゃ、この一棟四軒長屋の真暗な図体の中に、……」

と鏝を塗って、

「まあ、可やね、お前、別にお前、怪しいたッて、何も、ねえ、まあ、お互に人間に変りはねえんだから、すぐにさようならにしようと思った。だけれど、話の口明が、宿の女郎だ。おまけに別嬪と来たから、早い話が。

でまあ、その何だ、私も素人じゃねえもんだから、」

と目潰しの灰の気さ。

「一ツ詮索をして帰ろう、と居坐ったがね、……気にしなさんな。別にお前の身体を裏返しにして、綺麗に洗いだてをしようと云うんじゃねえ。可いから、」

と云う中にも、じろりと視る、そりゃ光るわ、で鍍を塗って、

「大目に見てやら。ね、早い話が。僕は帰るよ、気にしなさんな。」

「ええ、いや、私の方で、気にしない次第には参りません。」

欣八、ぎょっとして、
「そうかね、……はてね。……トオカミ、エミタメは
どんなものだ。」と字（あざな）は孔明、琴を弾く。

八

「で、その初会の晩なぞは、見得に技師だって言いま
した。が、私（てまえ）はその頃、小石川へ勤めました鉄砲組で
ございますが、」
「ああ、造兵かね、私（わっし）の友達にも四五人居るよ。中の
一人は、今夜もお不動様で一所だっけ。そうかい、そ

いつは頼母しいや。」と欣八いささか色を直す。
「見なさいます通りで、我ながら早やかように頼母しくなさ過ぎます。もっとも、車夫の看板を引抜いて、肩で暖簾を分けながら、遊ぶぜ、なぞと酔った晩は、そりゃ威勢が可うがした。」
と投首しつつ、また吐息。じっと灯を瞻ったが、
「ところで、肝心のその燃えさしの蠟燭の事でございます。
　嘘か、真か分りません。かねて、牛鍋のじわじわ酒に、夥間の友だちが話しました事を、――その大木戸向うで、蠟燭の香を、芬と酔爛れた、ここへ、その

脳へ差込まれましたために、ふと好事（ものずき）な心が、火取虫といった形で、熱く羽ばたきをしたのでございます。内には柔（やさ）しい女房もございました。別に不足というでもなし、……宿（しゅく）へ入ったというものは、ただ蠟燭の事ばかり。でございますから、圧附（おしつ）けに、勝手な婦（おんな）を取持たれました時は、馬鹿々々しいと思いましたが、因果とその婦（おんな）の美しさ。

成程、桔梗屋の白露か、玉の露でも可い位。けれども、楼（うち）なり、場所柄なり、……余り綺麗なので、初手は物凄（ものすご）かったのでございます。がいかにも、その病気があるために、——この容色（きりょう）、三絃（いと）もちょっ

と響く腕で――蹴(け)ころ同然な掃溜(はきだめ)へ落ちていると分りますと、一夜妻のこの美しいのが……と思う嬉しさに、……今の身で、恥も外聞もございません。筋も骨もとろとろと蕩(とろ)けそうになりました。……

　枕頭(まくらもと)の行燈(あんどん)の影で、ええ、その婦(おんな)が、二階廻しの手にも投遣(なげや)らないで、寝巻に着換えました私(てまえ)の結城木綿(ゆうきもめん)か何か、ごつごつしたのを、絹物(やわらかもの)のように優しく扱って、袖畳(そでだたみ)にしていたのでございます。

　部屋着の腰の巻帯には、破れた行燈の穴の影も、蝶々のように見えて、ぞくりとする肩を小夜具で包んで、恍惚(うっとり)と視(なが)めていますと、畳んだ袖を、一つ、スーと扱(しご)

いた時、袂（たもと）の端で、指尖（ゆびさき）を留めましたがな。
横顔がほんのりと、濡れたような目に、柔かな眉（まみえ）が
見えて、
　貴方（あなた）は御存じね――」
　延一は続けさまに三つばかり、しゃがれた咳（せき）して、
「私（てまえ）に、残らず自分の事を知っていて来たのだろう
と申しまして、――頂かして下さいましな、手を入れ
ますよ、大事ございませんか――
　と念を押して、その袂から、抜いて取ったのが、右
の蠟燭でございます。」
「へい、」と欣八は這身（はいみ）に乗出す。

「が、その美人。で、玉で刻んだ独鈷か何ぞ、尊いものを持ったように見えました。
遺手も心得た、成りたけは隠す事、それと言わずに逢わせた、とこう私は思う。……
――どちらの御蠟でござんすの――
また、そう訊くのがお極りだと申します。……三度のもの、湯水より、蠟燭でさえあれば、と云う中にも、その婦は、新のより、燃えさしの、その燃えさしの香が、何とも言えず快い。

　その燃えさしもございます。
一度、神仏の前に供えたのだ、と持つ手もわなく、

体を震わして喜ぶんだ、とかねて聞いておりましたものでございますから、その晩は、友達と銀座の松喜で牛肉をしたたか遣りました、その口で、

――水天宮様のだ、人形町の――

と申したでございます。電車の方角で、フト思い付きました。銀座には地蔵様もございますが、一言で、誰も分るのをと思いましてな。ええ。……」

とじろじろと四辺を眴す。

欣八は同じように、きょろきょろと頭を振る。

「お聞き下さい。」

と痩せた膝を痛そうに、延一は居直って、

「かねて噂を聞いたから、おいらんの土産にしようと思って、水天宮様の御蠟の燃えさしを頂いて来たんだよ、と申しますと、端然と居坐を直して、そのふっくりした乳房へ響くまで、身に染みて、鳩尾へはっと呼吸を引いて、

――まあ、嬉しい――

とちゃんと取って、蠟燭を頂くと、さもその尊さに、生際の曇った白い額から、品物は輝いて後光が射すよ

うに思われる、と申すものは、婦（おんな）の気の入れ方でございまして。

どうでございましょう。これが直（じ）き近所の車夫の看板から、今しがた煙草を吸って、酒粘（さけねば）りの唾（つばき）を吐いた火の着いていたやつじゃございますまいか。

なんぼでも、そうまで真（しん）になって嬉しがられては、灰吹を叩いて、舌を出すわけには参りません。

実は、とその趣を陳（の）べて、堪忍しな、出来心だ。そのかわり、今度は成田までもわざわざ出向くから、と申しますと、婦（おんな）が莞爾（にっこり）して言うんでございます。

これほどまでに、生命（いのち）がけで好きなんですもの、ど

この、どうした蠟燭だか、大概は分ります。一度燃えたのですから、その香（におい）で、消えてからどのくらい経（た）ったかが知れますと、伺った路順で、下谷（したや）だが浅草だが推量が付くんです。唯今（ただいま）下すったのは、手に取ると、すぐに直き近い処だとは思いました、……では、大宗寺（だいそうじ）様のかと存じましたが、召上った煙草の粉が附着（くっつ）いていますし、御縁日ではなし、かたがた悪戯（いたずら）に、お欺（かつ）ぎだとは知ったんですが、お初会の方に、お怨みを言うのも、我儘（わがまま）と存じて遠慮しました。今度ッからは、たとい私をお誑（だま）しでも、蠟燭の嘘を仰有（おっしゃ）るとほんとうに怨みますよ、と優しい含声（ふくみごえ）で、ひそひそと申す

んで。もう、実際嘘は吐くまい、と思ったくらいでございます。

部屋着を脱ぐと、緋の襦袢で、素足がちらりとすると、ふッ、と行燈を消しました。……底に温味を持ったヒヤリとするのが、酒の湧く胸へ、今にもいい薫で颯と絡わるかと思うと、そうでないので。――

カタカタと暗がりで簞笥の抽斗を開けましたがな。

――水天宮様のをお目に掛けましょう――

そう云って、柔らかい膝の衣摺れの音がしますと、燐寸を※［＃「火＋發」、248-3］と摺った。」

「はあ、」
と欣八は、その※［＃「火＋發」、248-5］とした……瞬きする。
「で、朱塗の行燈の台へ、蠟燭を一挺、燃えさしのに火を点して立てたのでございます。」
と熟と瞻る、ここの蠟燭が真直に、細りと灯が据った。
「寂然としておりますので、尋常のじゃない、と何となくその暗い灯に、白い影があるらしく見えました。
これは、下谷の、これは虎の門の、飛んで雑司ケ谷のだ、いや、つい大木戸のだと申して、油皿の中まで、

十四五挺、一ツずつ消しちゃ頂いて、それで一ツずつ、生々（なまなま）とした香（におい）の、煙……と申して不思議にな、一つ色ではございません。稲荷様（いなりさま）のは狐色と申すではないけれども、大黒天のは黒く立ちます……気がいたすのでございます。少し茶色のだの、薄黄色だの、曇った浅黄がございましたり。

その燃えさしの香（におい）の立つ処を、睫毛（まつげ）を濃く、眉を開いて、目を恍惚（うっとり）と、何と、香（におい）を散らすまい、煙を乱すまいとするように、掌（てのひら）で蔽（おお）って余さず嗅（か）ぐ。

これが薬なら、身体（からだ）中、一筋ずつ黒髪の尖（さき）まで、血と一所に遍（あまね）く膚（はだ）を繞（めぐ）った、と思うと、くすぶりもせず

になお冴える、その白い二の腕を、緋の袖で包みもせずに、……」

聞く欣八は変な顔色。

「時に……」

と延一は、ギクリと胸を折って、抱えた腕なりに我が膝に突伏して、かッかッと咳をした。

十

その瞼に朱を灌ぐ……汗の流るる額を拭って、

「……時に、その枕頭の行燈に、一挺消さない蠟燭が

あって、寂然（しん）と間（ま）を照（てら）しておりますんでな。

――あれは――

――水天宮様のお蠟です――

と二つ並んだその顔が申すんでございます。灯の影には何が映るとお思いなさる、……気になること夥（おびただ）しい。

――消さないかい――

――堪忍して――

是非と言えば、さめざめと、名の白露が姿を散らして消えるばかりに泣きますが。推量して下さいまし、愛想尽（あいそづか）しと思うがままよ、鬼だか蛇（じゃ）だか知らない男と

一つ処……せめて、神仏の前で輝いた、あの、光一ツ暗に無うては恐怖くて死んでしまうのですもの。もし、気になったら、貴方ばかり目をお瞑りなさいまし。——と自分は水晶のような黒目がちのを、すっきり瞻って、——昼さえ遊ぶ人がござんすよ、と云う。

可し、神仏もあれば、夫婦もある。蠟燭が何の、と思う。その蠟燭が滑々と手に触る、……扱帯の下に五六本、襟の裏にも、乳の下にも、幾本となく忍ばしてあるので、ぎょっとしました。残らず、一度は神仏の目の前で燃え輝いたのでございましょう、……中には、口にするのも憚る、荒神も少くはありません。

ばかりでない。果ては、その中から、別に、綺麗な絵の蠟燭を一挺抜くと、それへ火を移して、銀簪の耳に透す。まずどうするとお思いなさる、……後で聞くとこの蠟燭の絵は、その婦が、隙さえあれば、自分で剳青のように縫針で彫って、彩色をするんだそうで。それは見事でございます。

また髪は、何十度逢っても、姿こそ服装こそ変りますが、いつも人柄に似合わない、あの、仰向けに結んで、緋や、浅黄や、絞の鹿の子の手絡を組んで、黒髪で巻いた芍薬の莟のように、真中へ簪をぐいと挿す、何転進とか申すのにばかり結う。

何と絵蠟燭を燃したのを、簪で、その髷の真中へすくりと立てて、烏羽玉の黒髪に、ひらひらと篝火のひらめくなりで、右にもなれば左にもなる、寝返りもするのでございます。

――こうして可愛がって下さいますなら、私や死んでも本望です――

とこれで見るくらいました、白露のその美しさと云ってはない。が、いかな事にも、心を鬼に、爪を鷲に、狼の牙を嚙鳴らしても、森で丑の時参詣なればまだしも、あらたかな拝殿で、巫女の美女を虐殺しにするようで、笑靨に指も触れないで、冷汗を流しました。…

…
それから悩乱。
因果と思切れません……が、
——まあ嬉しい——
と云う、あの、容子（ようす）ばかりも、見て生命（いのち）が続けたさに、実際、成田へも中山へも、池上、堀の内は申すに及ばず。——根も精も続く限り、蠟燭の燃えさしを持っては通い、持っては通い、身も裂き、骨も削りました。
昏（くら）んだ目は、昼遊びにさえ、その燈（ともしび）に眩（まぶ）しいので。
手足の指を我と折って、頭髪（ずはつ）を摑（つか）んで身悶（みもだ）えしても、

婦(おんな)は寝るのに蠟燭を消しません。度かさなるに従って、数を増し、燈(ひ)を殖(ふや)して、部屋中、三十九本まで、一度に、神々の名を輝かして、そして、黒髪に絵蠟燭の、五色の簪を燃して寝る。

その媚(なまめ)かしさと申すものは、暖かに流れる蠟燭より前(さき)に、見るものの身が泥になって、熔(と)けるのでございます。忘れません。

困果と業(ごう)と、早やこの体(てい)になりましたれば、揚代(あげだい)どころか、宿までは、杖に縋(すが)っても呼吸(いき)が切れるのでございましょう。所詮の事に、今も、婦(おんな)に遣わします気で、近い処の縁日だけ、蠟燭の燃えさしを御合力(おごうりょく)に預

ります。すなわちこれでございます。」

と袂（たもと）を探ったのは、ここに灯（ひとも）したのは別に、先刻（さつき）の二七のそれであった。

　犬のしきりに吠（ほ）ゆる時――

「で、さてこれを何にいたすとお思いなさいます。懺悔（ざんげ）だ、お目に掛けるものがある。」

「大変だ、大変だ。何だって和尚さん、奴もそれまでになったんだ。気の毒だと思ってその女がくれたんだろうね、緋（ひ）の長襦袢（ながじゅばん）をどうだろう、押入の中へ人形のように坐らせた。胴へは何を入れたかね、手も足もないんでさ。顔がと云うと、やがて人ぐらいの大きさに、

何十挺だか蠟燭を固めて、つるりとやっぱり蠟を塗って、細工をしたんで。そら、燃えさしの処が上になってるから、ぽちぽち黒く、女鳴神(おんななるかみ)ッて頭でさ。色は白いよ、凄(すご)いよ、お前さん、蠟だもの。

私(わっし)あ反(そ)ったねえ、押入の中で、ぼうとして見えた時は、——それをね、しなしなと引出して、膝へ横抱きにする……とどうです。

欠火鉢(かけひばち)からもぎ取って、その散髪(ざんぎり)みたいな、蠟燭の心へ、火を移す、ちろちろと燃えるじやねえかね。ト舌は赤いよ、口に締りをなくして、奴め、ニヤニヤとしながら、また一挺、もう一本、だんだんと火を

移すと、幾筋も、幾筋も、ひょろひょろと燃えるのが、搦(から)み合って、空へ立つ、と火尖(ひさき)が伸びる……こうなると可恐(おそろ)しい、長い髪の毛の真赤(まっか)なのを見るようですぜ。見る見る、お前さん、人前も構う事か、長襦袢の肩を両肱(りょうひじ)へ巻込んで、汝(てめえ)が着るように、胸にも脛(すね)にも搦(から)みつけたわ、裾(すそ)がずるずると畳へ曳(ひ)く。

自然とほてりがうつるんだってね、火の燃える蠟燭は、女のぬくみだッさ、奴が言う、……可(よ)うがすかい。頬辺(ほっぺた)を窪ますばかり、歯を吸込んで附着(くッつ)けるんだ、串戯(じょうだん)じゃねえ。

ややしばらく、魂が遠くなったように、静(じっ)としてい

ると思うと、襦袢の緋が颯(さっ)と冴えて、揺れて、靡(なび)いて、蠟に紅(あか)い影が透(とお)って、口惜(くやし)いか、悲(かなし)いか、可哀(あわれ)なんだか、ちらちらと白露を散らして泣く、そら、とろとろと煮えるんだね。嗅(か)ぐさ、お前さん、べろべろと舐(な)める。目から蠟燭の涙を垂らして、鼻へ伝わらせて、口へ垂らすと、せいせい肩で呼吸(いき)をする内に、ぶるぶると五体を震わす、と思うとね、横倒れになったんだ。さあ、七顛八倒(しちてんばっとう)、で沼みたいな六畳どろどろの部屋を転摺(のめず)り廻る……炎が搦(から)んで、青蜥蜴(あおとかげ)の蜿打(のたう)つようだ。

私(わっし)あ夢中で逃出した。——突然(いきなり)見附へ駈着(かけつ)けて、火の見へ駈上(かけあが)ろうと思ったがね、まだ田町から火事も

出ずさ。

何しろ馬鹿だね、馬鹿も通越しているんだね。」

お不動様の御堂(みどう)を敲(たた)いて、夜中にこの話をした、下塗(したぬり)の欣八が、

「だが、いい女らしいね。」

と、後へ附加えた了簡(りょうけん)が悪かった。

「欣八、気を附けねえ。」

「顔色が変だぜ。」

友達が注意するのを、アハハと笑消して、

「女(あま)がボーッと来た、下町ア火事だい。」と威勢よく云っていた。が、ものの三月と経(た)たぬ中(うち)にこのべらぼ

う、たった一人の女房の、寝顔の白い、緋手絡（ひてがら）の円髷（まるまげ）に、蠟燭を突刺（つッさ）して、じりじりと燃して火傷（やけど）をさした、それから発狂した。

但し進藤とは違う。陰気でない。縁日とさえあればどこへでも押掛けて、鏝塗（こてぬり）の変な手つきで、来た来たと踊りながら、

「蠟燭をくんねえか。」

　怪（あやし）むべし、その友達が、続いて——また一人。……

大正二（一九一三）年六月

……

底本：「泉鏡花集成６」ちくま文庫、筑摩書房
１９９６（平成８）年３月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十五巻」岩波書店
１９４０（昭和15）年９月20日発行
入力：門田裕志
校正：高柳典子
２００７年２月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。